

琉球大学学術リポジトリ

牛の卵巢囊種の治療試験（予報）

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡嘉敷, 綏宝, Tokashiki, Suiho メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21648

牛の卵巣嚢腫の治療試験 (予報)

渡 嘉 敷 綏 宝*

Suiho TOKASHIKI: Experiment on the treatment of follicular cyst of cattle (Preliminary report)

I 緒 言

牛の卵巣嚢腫は繁殖障害の主要な原因の一つとして古くから多くの人々によって研究されたのであるが、その原因は最近に至るまで明かでなく、ために治療も対症療法の域を出ず、主に嚢腫の破碎が行われてきたが、一旦破碎しても再生するため、その根治は至難なものとしていた。

然し近年、内分泌学の進歩によって脳下垂体から分泌される性腺刺激ホルモンの卵巣支配が明かとなるに及んで、卵巣嚢腫の原因も略々究明されるに至った。Hancock, Venzki 及び Reece は脳下垂体前葉性腺刺激ホルモン分泌機能の不均衡、特に F.S.H. (Folliclestimulation hormone) の側の過剰或は L. H. (Luteinizing hormone) の不足に成因があるのではないかと推定、一方、Delange は肉用牛の脳下垂体の解剖学的、細胞学的研究を行って思牡狂を呈する牛の下垂体の肥大と前葉に於ける好酸性細胞の増加を認めている。又家畜衛生試験場中国支場の山内氏は脳下垂体前葉の性腺刺激ホルモン分泌機能の異常特に F.S.H. の過剰或は亢進にある事を実験的に証明した。

本病の治療には hormone 療法と併行して飼養管理の改善、特に濃厚飼料を減じて青草の多給並に運動の励行が最も効果的だと言われている。外国に於ては約 10 年前より Koch は思牡狂の牛にプロラン油剤 5,000~7,500 R.U. を注射して 35 例中 30 例に陽性結果を得、Merzdorf は同油剤 1,250 R.U. を用いて 11 例中 10 例に正常発情を見た。一方日本に於ても山内氏等が高単位の尿プロラン製剤を応用して、極めて良好な成績を報告して以来、多数の報告がある。筆者は沖縄に於ても卵巣嚢腫のため、繁殖障害に陥っている牛が相当数あるのに鑑み、尿プロラン製剤を応用してこれが追試をなすべく計画したのであるが、薬品の入手が遅れたために試験の進捗を見る事が出来ず、本報文においては、予報として僅にその概要を報告するに止める。

* 琉球大学農家政学部

II 試験材料及び方法

本実験は 1955 年 1 月より琉球種畜場及び那覇周辺に於て実施した。

1 試験材料

(1) 供試牛 供試牛は 2 頭で内 1 頭は Holstein, 他の 1 頭は Hereford である。症状は 1 頭が思牡狂, 他の 1 頭は無発情である。思牡狂の Holstein は子宮内膜炎を併発していた。

卵巢嚢腫の診断に当っては 1~2 週間の間隔で 2~3 回直腸検査を行い, 卵巢の変化を詳細に観察した後判定した。併発症の子宮内膜炎の診断は膿様分泌物の漏出及び直腸検査による子宮の形状, 弛緩度並に細菌学的検査を総合して診定した。

(2) 供試薬物 治療に用いた hormone は友田製薬株式会社製, プベローゲン (10,000 M.U.) である。その他, ドイツバイエル医薬品の油性プロラン 25 cc (5,000 I.U.) を使用する積りである。

2 試験報告

供試牛は子宮内膜炎の有無にかかわらず, すべて生理的食塩水で子宮洗滌をなし, 膿片や絮状物を除去し, 子宮内の残液を充分排出してからペニシリン加ズルフワミン (その外にペニフラシン B 及びストレプトマイシン, オーレオマイシン, ペニシリンをオレーフ油に溶解したものを使用する予定) を子宮内に注入して子宮内膜炎の治療を行った後, プベローゲン 1 万マウス単位を頸部皮下注射する。

III 試験の経過

実施中の試験牛は次の通りである。

試験牛番号	品 種	年令	産歴	最終分娩状況	分娩からの経過日数	症 状	嚢腫発生部位	種付回数	併 発 症
C 1	ヘレホード	10才	2	死 産	9ヶ月	無発情	左	1	なし
C 2	ホルスタイン	5	1	正 常	2ヶ年	思牡狂	左 右	1	子宮内膜炎

C 2 号については先に経済局畜産課宮里氏によって子宮洗滌後プベローゲン 10,000 M.U. を皮下注射した結果, 嚢腫の黄体化が見られ, 数日後には思牡狂の症状も消失したが, 注射後 60 日を経過しても発情なく (嚢腫 4 個とも黄体化しその中 3 個は萎縮退行したが 1 個は注射後 53 日まで残存しその後消失す) 再び右卵巢に嚢腫再生を認めたのでプベローゲン 10,000 M.U. を注射す。再注射後 13 日目に発情の徴候が見られたが種付をみあわせ, 次回発情時に種付した。

前表の外に Holstein 1 頭子宮内膜炎と卵巢嚢腫の併発したものがあがるが, 子宮洗

滌を施した結果、内膜炎の治癒を見、その後発情したので種付した。未だ妊娠診断を行っていないので妊否については不明である。該牛についてはホルモン療法を施していないので本試験より除外する。

終りに臨み種々便宜を与えられた農学部長島袋俊一氏並に技術指導下さった家畜衛生試験場北陸支場常包技官に謝意を表すると共に、本試験に御協力賜わった琉球種畜場長高江洲義弼氏外職員各位に深謝する。なお試験成績については例数の増加を期し、次回に発表の予定である。

参 照 文 献

1. 山内 亮：日本獣医師会雑誌，VI，no. 10 (1954)
2. 常包・佐藤：日本獣医師会雑誌，VII，no. 10 (1954)
3. 山内・常包：バイエル薬品部文献集，第1輯
4. 山内・芦田・乾：日本獣医学雑誌，XVI，no. 2 (1954)